

刈部 直・黒住 真・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎編

## 『日本思想史講座 2 中世』

ぺりかん社 二〇一二年・七月

A5 四〇八頁 三八〇〇円

本書は、さまざまな関心や方法により多彩な成果を生み出して現在に至る日本思想史研究を総括し、さらに今後の方向性や可能性を示そうとして編まれた日本思想史講座全五巻のうちの一巻で、総論一篇、各論十篇、コラム五篇から成る。以下、字数の制限からコラムは割愛し、総論と各論を採りあげ紹介する。

末木文美士「総論 中世の思想」は、まず石母田正・黒田俊雄・網野善彦らにより提示された新しい中世像の特質とその位置づけを説明し、ついで最近の新しい研究動向を踏まえて、思想史研究は仏・神・儒・国学などが複合的に絡み合い展開するものとして理解されるべきであるとし、さらに今後の可能性を示すものとして密教の重要性に言及したうえで「冥顕構造」という新主張も提言する。

阿部泰郎「中世日本の世界像」は、信貴山縁起絵巻を皮切りに行基日本図・聖徳太子絵伝以下の絵巻・仏像・説話・曼荼羅・縁起などの世界を縦横無尽に駆け巡り、日本の内外や天竺震旦本朝の三国や地獄極楽など、冥顕さまざまな非合理的にして壮大な中世の世界観を活写する。

蓑輪顕量「中世の仏教思想」は、顕密とそれ以外、寺僧と遁世門という二つの軸を措定し、顕密仏教の特徴的な思想や宗教活動

と、浄土門・禅宗門・日蓮宗・室町時代浄土系諸宗の僧侶の思想について説明し、これらに通底する本覚思想に言及している。

新田一郎「法と歴史認識の展開」は、中世に独自の法意識の在り方を歴史意識の反映として捉え、それを古代・中世にわたり「裁判」・「沙汰」・「徳政」・「制」などのタームを素材にして丹念に跡付ける。

菅野覚明「武士の倫理と政治」は、道理の語を軸に武士の倫理を検討する。所領経営における私権の行使に胚胎する武士のエートスとしての道理を基底とし、頼朝・泰時といった威徳ある主人の慈悲に基づく政道無私の政治にその発現を見定める。

平野多恵「無常観の形成」は、わが国における無常観の形成過程を、万葉集・古今和歌集などの和歌、平家物語・方丈記などの文学作品、安居院流の唱導資料、宝物集などにたどり、その過程における和歌の果たした役割を指摘する。

吉村均「文芸と芸能の思想」は、折口信夫の唱導文芸論を考察の糸口とし、靈異記・竹取物語から能楽に至る文芸・芸能を素材として、唱導者の語りによる目に見えない神仏の世界への誘いについて論述する。

和田有希子「禅林の思想と文化」は、禅宗を孤立的に理解する従来の宗派観の見直しを迫り、禅は神道・密教・政治など現実の諸要素と深く関わり、中世中後期の思想や文化の展開にその原動力として作用したと論じている。

伊藤聡「神道の形成と中世神話」は、本来人間の外的存在であった神を内なる神として心中に見出すようになり、やがて神話叙

述もみずからの始源の探求の方向に進み、その感得を求めて僧侶の伊勢参宮という宗教行為が生じたとする。

兵藤裕己「物語としての政治史」は、北条氏から足利氏の武臣交替の名分思想に対し、それを無化して天皇と直結しようとする「あやしき民」のいわば草莽・在野の思想、この太平記の対立軸は近世・近代の政治史に少なからぬ影響を及ぼしたという。

大桑斉「戦国思想史論」は、真宗・日蓮宗を中心に仏教土着の跡をたどり、その共通する思想的特徴として、多神教を前提とした阿弥陀・釈尊という最高神による一神教の形成と、仏法領・釈尊御領という仏がすべてを救済する超国家の理念を指摘し、天下思想や天道思想との比較を試みる。

本講座の編集方針の一つに、「いま議論が沸騰している問題、今後解明すべき重要な問題など、学界全体が共有すべき課題について、独自の切り口からテーマを設定する」とある。一読のうえ確かめられたい。

(小原 仁)